慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	史的研究と修史學(四)
Sub Title	
Author	今宮, 新(Imamiya, Shin)
Publisher	三田史学会
Publication year	1931
Jtitle	史学 Vol.10, No.1 (1931. 3) ,p.81- 95
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19310300-0081

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

史的研究と修史學（四）

第六節

ローマ史が如何にして、又如何なる時に於て、ローマ人の性格を表現するものとして、リビウスの視覺に登つたかと言ふ點は、我々の知ることの出來ない所である。而も幸な事には、近代の歴史學の第一位を占むる人々の中には、彼自らの創作的經驗の秘密を公開したものが多少ある。例へばミシュレー(Michelet)は一八六九年に、彼のフランス史(Histoire de France)の序文に於て次の如く述べてゐる。

「此の約四十年間に亙る勞作は、七月(一八三〇年)の閃光に依つてその起稿を思ひ出したのである。その記憶すべき當時に於て大光明に接し、予は佛國を認めることが出來た。佛國には從來年代記はあつたが、歴史と稱すべきものはなかつた。多數の非凡なる人物は、主として政治上の見地より之を研究した。何人も、未だ嘗て、佛國の活動の種々の方面に於ける發達に就て、詳細なる各部に研究を及ぼしたる者はない。……予は初めて一の精神を具へたる人格として之も見たのである。」

ローマ衰亡史の誕生を促すに至つた當時の靈感に就ての、ギボンの有名なる告白も又此處に擧げることが出來る。

「時恰も一七六四年十月十五日、予はローマに於て、キャピトル(Capitol)の廢趾に立つて瞑想にふけりつゝある時、僧侶等が靴をもらがたず、ジュピターの神殿に於て晩禱を唱へつゝあるを見て、初めてこのローマの都の衰亡を論述しようとする志を立てた。」(1)

此のミシュレー及びギボンの記述は注意を要すべきものであつて、著作に從事する文藝家の思想の動きを示す著明なる典型として、心理學の教科

書に引用さるべき價値がある。然しながら、この閃光の如き默示に依て得た著者の決心は、假令表面に表れたる所は如何なるものであるにもせよ、その第一歩であるとは言ひ難いものである。かく或る國又は時代の活畫が、突如として著者の眼前に表れるに先きだつて、必ずやその背後には、受胎の時期及び潜在的發達の時期が存するものである。ギボンの自叙傳中殊に注意すべき點の一つは、彼の文學的經歷に於て、この最も興味ある瞬間に先きたつ思想發達の順序を詳細にたどり得ることである。

先に論及した如く、藝術の特徴である創作行爲は經驗が藝術家の精神中に生々とした記憶として存し、而して更に熟考に依て再造された時に、その起原を有するものである。藝術上の作品は、一の經驗の謄寫又は寫眞ではなくて、その經驗に依て生じた印象の霧を通じて見たる經驗である。それは、個人的の希望、驚怖、得意、憤怒等の表現ではなくて、藝術家と直接の關係を有しないかゝる情緒の表現である。

さて、その國の歷史を著作しようとする藝術家である或る歷史家の個人的經驗は、過去の實際の事件そのものではなくて、他人が此等の事件に就て述べてゐる所のものである。歷史家は自ら目擊した事件に就て筆を執るのではなく、他人の記述を基礎として想像した事件について記述するのである。此の著作の方法は、歷史家特有のものではなく、多くの戲曲家及び歷史小說家は同一の方法に依てゐるのである。然しながらアリストテレスの言つてゐる樣に、想像的文學の任務は、「不遍的の事象」を示すにあり、これは行爲又は事件を性格の結果として記述することに依て成し遂げられるものである。例へばシエクスピヤやウオルター・スコットは、世人の熟知してゐる歷史上の事件の結果を是認しながら、之に關係してゐる人物が、如何にして或る危機に臨んで、一定の方法を以て活動するに至つたかのその階段を表したのである。故に、或る一定の性格を有する人物が、或る境遇に於て、如何なる行爲をなすかと言ふ心理學的の問題にその興味を存するのである。此處に於て、

注意すべき重要なる點は戯曲家及び小説家は、かゝる方法を取る場合に、安全な地歩を占めてゐると言ふことである。何となれば、その記述する所が、もし人間性に訴へて眞實であると認められるれば、則ちその目的を達し得るからである。然るに之に反して、歴史家は之と同じ方法を採用する場合に於ても、その地歩は危いものである。歴史家の「性格描寫」は、推測と想像とを基礎としてゐるものである。戯曲及び小説は、性格の描寫であり、歴史は過去に起つた事件の記述である。こゝに於て、彼に取つては眞實と思はるゝことも、此に取つては單に實體のない想像に過ぎないことがある。

更に又、過去の事情を表現する場合に、戯曲家も小説家も、即ちシェクスピヤもスコットも彼等の參照した記錄中の記事のみに制限さるゝことはなく、主として彼等自身の經驗に依て得た人間に對する知識を基礎としてゐたことは言ふまでもない。全く之と同じ樣に、藝術家たる歴史家の經驗も彼の讀破したものにだけ制限されず、過去の事件を記述するに當つても、現在の國狀をも明に表現せんとするのである。傑出してゐる史籍は先に述べた如く、國家存亡の一大危機の反映である。歴史家の興味は自分の生活してゐる當時の變遷狀態に依て刺戟されるものである。歴史家にとつて過去が目前に甦つて來るのは、文書の發見に依るよりも、自分の目擊した重大なる事件に依て刺戟される結果である。藝術家は人生の或る特殊の點に關しては、その同胞の意識を感ずるものであるが、藝術家たる歴史家も之と同樣、否、彼がその代辯者である公衆よりも、更に痛切に國民的感情を感じ得るものである。

愛國心と政黨氣質とは、總ての感情の中で、之を「脱却する」ことの最も困難なるものである。憤怒の結果、人は時として己を失ふものである。人がもし憤怒の情に依て左右さるゝ時は、他人にその感情の如何に甚だしいかを說く能はざることは明である。何となれば憤怒の絶頂にある時には、彼は憤怒其者であつて、反省熟考等は全然不可能であるからである。然し時間を經過する時には、其の憤怒の情は冷却して、後日に至つては、本人

自ら其の當時の事情とそれに伴ふ事件とを、或は滑稽を交へて、或は意識的自負の感情を以て記述することが出來る。時間は感情に形體を與へ、本人をして直接自分に關係のないものとして、之を觀察することが出來るやうにするのである。憤怒の直接の表現は藝術ではない。之に反して、形體を與へられた、分離された、「遠距離に置かれた」見解は美的表現の眞髓である。(2) 若し政治上の事件について、之に形體を與へ、又は之を「遠距離に置かうとする」にあたつて、人々は殆ど打破し難い困難に遭遇することは明である。政治上の問題が討論の主題となつた時は、感情が必ず激發される。――特に政治上の重大危機の場合に於ては、それが甚だしいのである。實に愛國心はかゝる感情の抑制、制限を禁ずるものであると言ふことが出來る。一國の歷史を記述するに當つて、事實を誤つて述べる時は、假令一世紀以前の事であつても、必ず公憤的抗議を生ずるのである。愛國心の本質は、その國家と自己とを同一視するにある。即ち記錄に依て傳へられた過去の知識も、個人の記憶として實現されるやうになることである。かくて歷史家が之を記述するに當つても、單なる傍觀者として之を記するのではなくて、その事件に依る個人的の影響を受けたものとして、之を記するのである。故にモムゼンは、その歷史家としての多くの經驗に依て、次の如く言つてゐるのである。「予の如く、歷史上の大活劇を體驗した者は、歷史が憎愛の念なくして起稿されず、又著作されざることを認めなければならない。」(3) 愛國心と政爭とより分離することの出來ない此の熱烈なる個人的感情は、一方に於ては、歷史に特殊な性質を與ふると共に、他方に於ては、修史上の藝術に一大妨害を與へるものである。

此處に至つて、近年度々試みられた「公平」の主義――これは歷史研究家の非常に重視してゐる處のものであるが、(4)――に對する抗議にも、又十分の理由あることが分るのである。マンデル・クレートン（Mandell Creighton）はケンブリッチ近世史(Cambridge Modern History)の緒言に於て次の如く言つてゐる。「茫漠として制限なき近世史の

大なる範圍に於ては、一定の見地が記錄の性質を定むるものである。もし一定の見地がなければ、其の書物全體は何等明瞭なる觀念に依て統一さるゝことなく、單なる事實蒐集の域に陷つてしまふ。一定の主義傾向を避けようと努める著述家の著作は、面白味を缺き讀むにたへない。又あまりに公平を重んする時は却つて是非の判斷を誤るものである。」カンニンガム(Cunningham)も又之と同一の主張の下に次の如く言つてゐる。「予を以て見れば、歴史家は公平なるべしとの要求は無意味の感がある。又假りに意義あるとするも、それは單に衒ひに過ぎないものであらう。」(5) 修史學上に於いて、「公平」を要求することは無意味の事である。然し、いやしくも歴史を研究する者は、歴史上の人物が、彼の行爲について言つてゐる理由又は辯護が、其の努力の眞の目的と殆ど一致しないものであることを知るのである。「不公平」とは、歴史家が一方に偏し、憎愛に依て左右され、個人的並に愛國的打算に依て「動かされ」、——單に同國人の爲の記憶の機械に過ぎないやうになることを指すのである。歴史家に「公平」を要求することは、歴史記述の上に於て「距離」の必要なることを、無意識に承認することである。

近世の歴史家は、「公平」の問題に就ては、ポリビウス(Polybius)が、フィリヌス(Philinus)及びファビウス(Fabius)に就て論じた論旨以上には何等の進歩をも示してゐない。

彼は次の如く言つてゐる。「此の兩歴史家の行爲と主義とを照して、予は決して此兩作家が故意に誤つた記事を殘したと思ふ事は出來ない。予は彼等を以て、丁度戀愛におちいつた人と同じ精神狀態にあつたと思ふ。黨派心と極端なる先入觀念とは、フィリヌスをしてカルタゴ人の行動は、總て知識と名譽と勇氣とを示すものであるが、ローマ人の行爲は之に反するものであると思はしめたのである。而してファビウスは之と全然正反對の意見を懷いてゐた。」更に彼は語をつゞけて次の如く言つてゐる。「さて、人生の他の關係に於ては、是の如き熱烈なる感情を脱却することを、世人は寧ろ躊躇するであらう。何となれば、善良なる人物は、その友人に對しては誠實に、その國家に對しては愛國心を有しなければならない。その憎愛に於て、友人と心を一にしなければならないからである。然しながら、人一度歴史家としての倫理的態度を取るやうになれば、彼は總てこの種の打算を捨て去らなければならない。」(6)

此のポリビウスの言ふ歴史家の「義務」は十分に承認せられ、歴史家は實際生活に於ける利害の念を應用し得ないものと認められたのである。勿論國家的歴史家が、その研究をなすに當つて、全く人情を棄て去るべしと言ふのではなくて、寧ろ彼の研究の性質上、「善良なる人」が、その友人に對して感ずる誠實の思想の代表者となり、國民統一の精神である愛國心の代辯者とならなければならない。然しポリビウスの此の歴史家の「義務」は、後世の歴史家に依て、一の倫理的原則として認められたけれども、ポリビウスの目的は、彼の言つてゐる如く、歴史家をして「その同胞より全然隔離せしむる」方法を取らしむるにある。――彼の目的は倫理的判斷を課すことに依て、藝術に必要なる「距離」を生ぜしめんとするにある。

歴史上の研究にあたつて、偉大なる歴史家達が如何にこの「距離」の問題を承認し、その實行に就て苦心したかは、ギボンの自叙傳に於て明に示されてゐる、――今や再びこの自叙傳に就て一言しよう。ギボンの成功は、一般に屢々論ぜらるゝ如く、彼に大問題を與へた幸運なる偶然の機會に依るのではなく、又、彼の文體の華美であることや、その論述の正確なることに依るのでもない。實に彼の成功は、歴史を記述するに當つての熟考と、人として出來得る限り失敗の要素を除かんとして爲したる幾多の苦心の結果である。一の藝術としての修史學に於て、特に擧ぐ可き點は、一方に於ては、歴史家が自己の作品を世人より尊重せしむるに足る程の十分なる努力を盡して著述すると共に、他方に於ては、人生に關する限り彼の往時の經驗を利用しては晩年の成功を博し得ることの出來ないと言ふ點である。ギボンの名聲は全く一部のローマ衰亡史の上に存してゐるのである。

ギボンの自叙傳の讀者は、その青年時代より彼は、「歴史家の資格を得んと熱望してゐた」事を回想するであらう。ギボンはその一道の光明を得て、ローマ史の題目を擇ぶに先き立ち、數年間を適當な題目を得るに費した。ギボンは初め英國史の或る一時期に就て著述しようとの考を懷いた、――その問題としてギボンの注意を惹いたものにリ

チャード一世あり、貴族戰爭あり、黑太子の勳功あり、サー・フィリップ・シドニー(Sir Philip Sydney)及びサー・ウォーター・ラレー(Sir Walter Raleigh)の傳記があつた。(7)然しギボンは、その思想がやうやく熟して來るや、英國史上の問題を全然棄てゝかへりみなくなつた。彼は一七六二年七月の日記に次の如く記してゐる。「予は予の英雄「ラレー」を棄て去る樣になることを恐れる。……幸にして、予はその妨害(これに就て彼は詳しく述べてゐる)を除き得るとするも、予は英國の近世史を、恐れて之を避けざるを得ない。蓋し英國の近世史上に於ては、總ての人物は是非の議論が未だ定らず、總ての讀者は、或は味方となり、或は敵となる。著作家が一度一黨派の旗を高く揭げたと認めらるれば、必ず反對黨の攻擊を受くるのである。」而して彼は「故に予は安全にして、更に廣い問題を擇ばなければならない。」と結んでゐる。次にギボンは「スイス人の自由の起原及びその確立の歷史」に注意を向けた。――蓋し、スエスはギボンにとつて第二の故鄕であつたのである。この「立派な問題」は非常に彼の興味を引き、ギボンはその「第一編」をあらはしたが、世間よりあまり歡迎されなかつたので、之を中止してしまつた。彼の言つてゐる樣に、彼は未だ歷史と言ふ「特殊の文學に眞に適切な文體と公平なる論調」(6)とに、達してゐないことを自覺したのである。かくて、數年間研究と熟考とを重ねた後に、自分の非常に愛著を感じてゐる英國及びスイスの歷史を著述することを全く放棄したのである。即ちギボンは民族的歷史の特徵は利害感情に依て左右さるゝ點にあるからして、眞に藝術上の作品と兩立しないことを發見した。言ひ換へるならば、一方に於て著作家は、「公平なる論調」を取ることが出來ないと共に、讀者は之を讀むに當つて、その政治上の感情を抑へることが出來ないのである。かくて、修史學上に於ける重大なる問題に就て考究した後に、所謂歷史的の「距離」は、政治及び愛國的感情のもつれから脫し得る樣な遠い過去の時代に就てのみ作り得ることを知つたのである。

さて此處に於て、過去の歷史を讀んでその影響

について考察する人は、この歴史上の「距離」なるものは、實際古來の歴史家の著しい特色であつた事を知るのである。これは疑もなく事實である。然しこの場合に於ける「距離の實現」は、藝術家の技倆に依るものではなくて、それは時間の結果である。古來の歴史家の作品は、一見背理の如く思はれるけれども、吾々に對しては十分「距離のある」藝術である。然しその著作された當時の人々に對しては、寧ろ「距離を短縮した」ものであつた。要するに、その著作に表現されてゐる感情は、作家の當時に於ける感情であり、之を讀んで生ずる感情は、讀者の當時に於ける感情であると言ふ結果になるのである。故に讀者が、歴史家の表現してゐる政治上の感情に依て直接に動かされない時は、その當時の人々にとつて「距離を短縮した」事も、今日の讀者より見れば、一の藝術であると言ふことが出來る。然しながら、名作を著はさんとする作家は、かゝる偶然の事情の發生を豫期して滿足してはゐない。藝術品でない著作、――マーク・パチソンの言つてゐるやうにその當時の「標準的」の歴史、――は後世の讀者に依て評價さるゝことと少く、寧ろ忘れ去られてしまふのである。之に反して、ギボンのローマ衰亡史の如き偉大なる藝術品は、如何に年月を經ても、その名聲を保ち得るものであつて、假令、その細目の點に於て、チュートン及びラスブ人の「穿鑿家達」の非難を受けても、少しもその價値を減じないのである。

藝術の作家は、明確な客體又は繪畫を創造して、之に依て人の感情（これは黨派心や敵愾心ではない）を覺醒し、「藝術品に依てのみ與へ得べき調和と必然の感じ」に依て、讀者を滿足せしむるものである。歴史家の目的とする所も、意識的にもせよ、無意識的にもせよ、かゝる明確なる客體を創造するにある。スタッブスが、歴史家の事業は「作者の思想に忠實なる藝術的統一、完全なる對象」を作るにあると言つてゐるのは、この點を說明してゐるものである。(9) 歴史家の成功を妨ぐる大妨害物は歴史家が躊躇的の態度をとつて、自己を深く賴むことをせず、絶えず批評眼を以て修史に非難を加へ、創造的藝術家として自己を觀察する

ことを躊躇する點にある。實に現代の歴史家が修史を論ずるにあたつては、いさゝか惡寒を感ずるが如き感がある。而して、是の如く、今日の歴史家が修史について臆病となつた原因は、スタッブスより引用した次の如き言葉の中に、之を認めることが出來る。即ち彼は、「歴史家の著作の結果は、作者の思想に忠實なる藝術的統一、完全なる對象であるべきである。」と言つてゐるが、更に言葉をつゞけて、「若し歴史家が、その材料の取り扱ひに於て、偏見に陷ることなく、眞實の發見し得らるゝ範圍内に於て、眞實を忠實に語つたならば、」と言つてゐる。此處に於て「若し」なる一語は、頗る問題を引き起すべき疑問である。學研的歴史家は藝術家でなければならない。然し彼は之と同時に、靈感を却け、想像を疑はなければならない。而も此の靈感と想像とがなければ藝術の成立は不可能なのである。スタッブスが是の如く批評的精神を誤つて適應した爲めに、クレートンやカンニンガムの如き人々が、之に對して抗議を試みたのである。實に藝術家の視覺に依てのみ、初めて要求された「公平、」――即ち「距離」――を得ることが出來るのである。視覺は決して個人的感情に服從することはない。「藝術上の作品は自己の表現ではなくて、距離の遠ざけられた精神上の内容を間接に表示したものである。」(10) 而して此の潜在的表示は、ミシュレー及びギボンの經驗した樣に閃光的光明の中に於て意識的に實現せられるのである。

註

(1) The Autobiographies of Edward Gibbon, ed. by John Murray (2d ed., London, 1897), P. 302. 同じく四〇五―六頁を參照せよ。「予は、自分の文學的經歴に於て、あの日を、あの時を、最も興味あるあの瞬間を忘れることが出來ない。丁度十月十五日、夕闇のせまる頃キャピトルに於て瞑想に耽りつゝある時、僧侶等が靴をも穿たずに、シュピターの神殿に於て連禱を唱へつゝあるを見て、初てその歴史を書かうとする考を懷いた。……」

(2) 此の問題に關聯して歴史研究家は British Journal of Psychology 第五卷(一九一二年出版)八七頁より一一八頁に收められてゐる Edward Bullough の「Psychical Distance as a Factor in Art and an Aesthetic Principle」と題する有名な論文を注意しなければならない。Bullough 氏は次の樣に言

つてゐる。「この距離は物體其物と自己に對する物體の影響を分離し、其の物體を實際上の必要及び目的と引き離すことに依て得られる。」「この距離は、極めて感情的色彩を帶びた個人的關係を記述せしめるけれども、而も特殊の性質を有してゐる。此の特殊の性質とは、その關係についての個人的性質が、言はば濾過されたと言ふ點に存する。即ち個人に對する印象の實際的具體的性質は脫却されるが、而も、その元來の本質は失はれないのである。」(九一頁)「此の距離を失ふのは次の二點にある、即ちそれは、『距離を輕んずること』と『距離を重んずること』である。『距離を輕んずること』は世人の最も普通に陷る誤であつて、『距離を重んずること』は藝術の屢々陷る誤りである。」(九四頁)

(3) G. P. Gooch, History and Historians in Nineteenth Century (London, 1913), p. 45-8 に引用されてゐる。Bishop Stubbs の態度を注意すべし。彼は次の如く言つてゐる。「多少の感激の存する場合でなければ、歷史は著作されない樣に思はれる。歷史を起稿しようとする企望を懷かなければ、何人も熱心に著作に從事する者はない。」Seventeen Lectures (Oxford, 1887), p. 126.

(4) 「我々の祖父の時代に知られた歷史と、今日の時代の歷史との間に深い塹壕を掘つた著作家の第三の特徵は、彼等の公平の敎理にある。」Lord Acton, A Lecture on the Study of History (London, 1896), p. 44

「歷史家の第一の任務は偏見なく、憤怒の情なく、先入觀念及び熱情なくして、其の研究に從事するにある。歷史家は現代のあらゆる感情より脫却されなければならない。」Camille Jullian, Extraits des historiens français du xixe siècle (6e éd., Paris, 1910), P. cxxvi.

(5) William Cunningahm, "Impartiality in History," Rivista di Scienza, I (1907), 121.

Sociological Papers, (London, 1906), II, 229 に揭げられた G. M. Trevelyan の意見を參照せよ。「歷史は、或る一定の見地より考究されなければならない。歷史に於て全くの公平を主張することは、歷史上の事實が考研の材料である以外に、何等かの價値があると主張するようなものである。」

(6) Polybius, i, 14; tr. by E. S. Shuckburgh.

(7) Autobiographies, as cited, pp. 258-59; 又 pp. 193-97, 275-78, 301-2, 407-9 を參照。

(8) Autobiographies, as cited. pp. 195-96, 276, 408.

(9) Stubbs, as cited, p. 112. Caird は歷史家の研究方法を適切に記述してゐる。即ち彼曰く、「歷史家は、その研究材料として幾多の種々雜多に見ゆる材料を整理し、無意識に一の効果を生ぜしめんとする念に驅られ、時代の精神を作り、又は時代の精神及び人民の特質的の精神を表現し得るやうな事件を直觀的に撰擇するものである。」University Addresses (Glasgow, 1899), pp. 244-45. Albert Sorel は Nouveaux essais d'histoire et de critique (Paris, 1898), p. 12. に於て次の如く言つてゐる。「歷史家の總ての研究方法及び技術は

客體の像を保持し、諸表象を合併し、類寛し、完全で永久に傳へ得可き一の像を創造することに於て、天賦の能力を發揮し完成するにある。人間の歴史を作るは、丁度自己の生涯の追想を造るやうなものである。」

(10) Bullough, as cited, p. 115.

第七節

以上の論旨にして誤ちなしとすれば、修史は學者の無色無味の製作物ではない。實にこれは國民的存在の意識の精神的反映であり、(1) 人人がその屬してゐる國民の生活に就て抱懷してゐる記憶である。又これは、社會を成立せしむるに至つた精神の表現であり、その情神の擴張するに從つて形式を新にするものである。實に此事たるや歴史家が近代に就いて記するも、過去に就いて論ずるも共に眞理として認めらるゝのである。モムゼン、(Mommsen) フェレロ (Ferrero) エヂアード・マイヤー(Eduard Meyer)の如きは、何れも遠い過去の時代に就いてその史筆を振つてゐるが、而も常に自己の時代の聲を以て語り、自己の屬してゐる社會の理想と希望とを述べてゐるのである。歴史家が、「普通の世間並の人々の如く、自然の衝動」に動かさるゝのは、少しも批難を受く可き點でなくて、反つてその職分に忠實なるものと言ふ可きである。何となれば歴史家は、その稿を起すや、一學究として之を爲すのではなく、一國民の代辯者として之に着手するからである。

ギリシャ時代より今日に至るまで、歴史家の間に於ては、常に歴史の効用に就て議論を闘はすの傾向がある。ツキヂデスやポリビウスの議論を反覆することを避けて、事實に就て之を見れば、吾々は直ちに歴史なるものは國民的自負心を表現するもので、個々の個人をして、その共同の國家に對する態度を統一せしむるにあづかつて力ある一國の思想を生ぜしめるものであることが分るのである。實に國民性の愛情は、主として、過去の事實に對する共同の自負心に基づいてゐるものである。「眞の愛國心は土地に對する愛情とは異り、過去に對する愛情である、我々に先き立つ世代に對する尊敬である。」(2) 歴史家は、人種及び人民の

運動に就いて、綿密なる研究を行ふものである。歴史家の「發明」、歴史家の新機軸等は、要するに主として陳腐な材料に生命を與へ、現代の光明に照して記錄を解釋し、過去の記憶を復活し、之を再生せしむるにある。感情と行爲との統一を生ずる爲に、人を感動せしむる如き知識としての此種の歴史の力は、實に、十九世紀に於ける著名なる發見の一つである。(3) 此の手段に依て、小國民の精神は、新なる活氣をうけ、大國民たらんとするの想像力が刺擊され、侵略膨脹を試みるに至つたのである。前世紀に於て、愛國心が覺醒せらるゝに至つたのは、實に之を歴史家の努力に歸しなければならない。(4)

歴史家の力の是の如く重大なることを承認する時は、更に一歩を進めて、ガブリエル・モノー(Gabriel Monod)と共に、次の如く言ふことが出來るのである。「歴史は、秘密に而も健實の方法を以て、祖國の偉大の爲に盡すと共に、人類の進歩の爲に盡すことが出來る。」(5) 實に歴史は、十九世紀に於て、眠つてゐる感情を覺醒せしめたばかりでなく、更に人民をうながして、將來に望を囑して活動せしむるに至つた。アテネ人の場合に於ける如く、成功は野心を生ぜしめるものであつて、歴史家は、ヘロドトスと同じく、急進的政策を主張した。ヒルン(Hirn)は次の如く言つてゐる。「過去の事業を再說し、又は再現することに依て、子孫は健全なる自負の感情を養ふことが出來る、而してこの健全なる自負の感情は、成功の極めて重要なる要素をなすものであるが、」(6) 特に、列國の爭鬪の止むことのない今日の國際關係に於て、國家の存在を維持せんとする場合には、さうである。今日に於ては古代に於ける如く、迷信等に依て兵士の士氣を鼓舞することは不可能であるから、歴史を說く者は古代の吟詠詩人の役割を演ずべきであつて、その任務は極めて重大であると言はねばならぬ。歴史も又他の藝術と同じ樣に、平凡の人の手になる作品を取つて評價すべきではなく、大家の作をとつて評價すべきである。歴史は單に批判考證を訓練する爲の利器ではなく、又一般文化を向上せしむるに適する文學でもなくて、

實に、それは廣大なる世界に於ける、偉大なる衝動的精神であり、人類の活動を鼓舞する活氣ある力である。

歷史の効用に就て、以上の如く說明を試みたのは、歷史研究法を論ずる者が、修史の如何になすべきやに就ての意見を主張するに重きを置いて、修史が實際如何に行はれつゝあるかを、閑却することが甚だしい爲である。實に、歷史研究の上に於て、歷史家が其の問題を論ずるに當つて、相對的即ち歷史的の批判を用ひることをなさず、絕對的即ち哲學的批判を固く守つて動かない爲に、困難に陷ることが非常に多いのは實際に於て證明さるゝ所である。(8) 此の「發生的研究方法」の一大功績は、我々をして個人的判斷の直接關係を有しない點にまで逆らしめ、又進步發達の進路をたどらしめ、かくて我々の偏見をして、之に交涉なからしめ得る事にある。此の發生的研究方法の特に必要であるのは、歷史の場合に於て之を認め得る。而して修史の歷史的研究の結果として知り得べき著名なる點は、過去の歷史の記述に於ける社會の利害關係である。「歷史」とは、即ち同じ團體に屬する人々の共通に所有する記錄であるが、此の文學は決して之を棄却することも出來ず、又他に之が代用物を求むることも出來ない。何となれば、歷史は一定の社會的の必要に應じて生じたものであるからである。此の記錄に對して、材料を供給することは、研究上決して價値の劣れることではない。實に、古代の記錄を研究して、「實際の事實如何」を明にし、國威を發揚することは、學者の同胞に對する義務であるように思はれる。

然しながら、今日の學者の心中には、歷史の研究は國民的虛榮心を滿足せしむるより、更に他の目的を有しなければならないと言ふ希望を懷いてゐる者がある。そして、歷史は歷史其物の爲に研究さるべきであると言ふ主張は、未だ猶ほ、その目的は十分に意識せられないが、やゝ異る方向への努力を示してゐるものである。以上の議論に依て明白である如く、歷史的の研究を科學的結果に到達せしむる上に於て、第一の妨害物は修史を重視して、研究を輕んずるにある。然しながら、歷

史家の間に於ける傳統は極めて有力なものであつて、歴史家は、「歴史」とは單に年代記的の記述に過ぎないものと認め、かくてギリシャ人の間にあつても、批評考證の未だ起らない前の史籍を以て、眞の歴史であると見做す者があるのである。

さて今や、史學の研究者が、科學的結果に到達することを以てその目的とした場合に採用すべき手段如何に就て記述を試みることが順序であるやうに思はれる。然し未だその取る可き道は明瞭でないのである。何となれば普通の說及び傳統に重きを置く者は、「論理學は遂に歴史的研究法を正當なるものと認めた。」――この歴史的研究法とは修史を意味してゐる、――と言つてゐる。それ故に更に歴史と哲學との關係如何について考察しなければならない。（完）

註

（1）「宗教改革は、世界を動かして、新時代に入らしめた如く歴史にも新生命を與へてゐる。宗教改革の結果である國民的存在の意識は、畢竟するに、この意識の精神的反映に過ぎない、歴史の研究に於て自らその證明を求めてゐる。」J. R. Green, Historical Studies (London, 1903), p. 56.

（2）Fustel de Coulanges, Questions historiques (Paris, 1893), p. 6. Ernest Renan, "Qu'est-ce qu'une nation," in his Discours et conférences (Paris, 1887)

（3）「少くとも獨乙に於ては、輿論に對し、又は國民的決心に對して、最後の論決を與へたものは、抽象的の學者ではなくて、前後相通じて一の團體をなしてゐる歴史家である。」Lord Morley, Notes on Politics and History (New York, 1914), p. 183.

歴史が國民精神の復活にあづかつて力あることを發見した者は、世人の一般に知つてる樣に Stein である。彼は一八二九年に次の如く記してゐる。「予は一八一八年に於て此事業（獨乙中古史料叢書の編纂――譯者註）に着手しようと思つた。予がかく思ひついた動機は、適當に歴史上の記念物を蒐集し、整頓する事は、國民の名譽となる所であり、歴史を以て愛國心を刺戟するものであり、私慾を抑へて愛國心を盛んにする有力なる手段であると認めたからである。」Sir J. R. Seeley, Life and Times of Stein (Cambridge, 1878) III, 499 を見よ、又同書四四一頁以下を參照せよ。Schopenhauer も一八一八年に、「只、歴史に依てのみ、一國民は完全に自己を意識し得可し。」と言つてゐる。The World as Will and Idea, tr. by R. B. Haldane and J. Kemp (London, 1886), III, 228.

（4）Lord Acton, History of Freedom, and Other Essays

(London, 1907), pp. 270-300 中の Nationality (1862) 及び同人の Historical Essays & Studies (London, 1908). p. 348 中の German Schools of History [1886] H. M. Stephens, "Modern Historians and their Influence on Small Nationalities" Contemporary Review, 52 (1887), 107-121 及び彼の演說 "Nationality and History," American Historical Review, 21 (1916), 225-236

Cromer 伯爵の論文 "The Teaching of Patriotism," Nineteenth Century and After, 78 (1915), 1012-20 以上の諸論文を此問題に關しては讀む必要がある。

(5) 此の意見を更に實際に適用して Zu Rhonsen は次の樣に言つてゐる。「愛國者として歷史を研究せよ。愛國心は研究に情熱を與ふるものである。『神聖なる祖國の愛は之を活躍せしむること』と言ふ言葉は、獨乙中古史料 (Monumenta Germaniae historica) の格言としたものである。然しショウビニストとなつてはならない。ショウビニズムは損害を與へ、不正を行ふのきらひがある、我々獨乙人は決して世界に於ける唯一の國民ではない。」Anleitung zum Wissenschaftlichen Studium der Geschichte (2. Aufl., Berlin [1910]), p. 5.

(6) Yrjö Hirn, The Origins of Art (London, 1900), pp. 178-179 及び pp.180, 268 參照。

(7) 「之を故人について言へば、Macaulay. Thiers, 之を現代(一八九五年)の大家について言へば、Mommsen. Treitschke の樣な偉大にして人に深い印象を與へる人物は、其の人格を紙面に反映せしめるものである。これは一大文豪の常に行ふ所であつて、そして一大文豪は、よく可もなく不可もない多數の歷史學に匹敵することが出來る。」Lord Acton, A Lecture on the Study of History (London, 1896), p. 30.

(8) 「(哲學的) 見地は一定の標準、明確なる原則の存在を認め、(歷史的)見地は、我々をして歷史的由來の一大問題に到らしむるものである。第一の場合即哲學的見地に立つ時は、我々はその考研せんとする問題を、一定の標準、又は原則に訴へて、その原則を假定し、又は證明しなければならない。後の場合、即ち歷史的見地に立つ時は我々は、その研究の對象を歷史的に、時間空間に於けるその對象の經歷及び環境と關聯せしむるものである。」J. T. Merz, A History of European Thought in the Nineteenth Century (Edinburgh, 1912), III, 131.

今宮新